
Traveling High

海野真水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Traveling High

【Nコード】

N59860

【作者名】

海野真水

【あらすじ】

海の少女・ブルージーと出会った事で、空人・ジナーフの運命は大きく変わっていく。

1 青い海で。（前書き）

どことなくエ。レカと被るじゃん！ と言われそうですが（笑）、それ以前に見た夢をモチーフにしています。

「まみず」の名前で登録していたものを、こっちに引っ張ってきました。

1 青い海で。

夜が明けて、辺りがすっかり朝の光に照らされて明るくなった頃。

海辺のボロボロの小屋からひとりの小柄な少女が、今にも沈みそうなおんぼろ小船を軽々と引つ張って、さらさらな砂地に足を取られる事なく海へと向かっていった。

白いTシャツにジーンズのホットパンツ姿が、すらりとした手足を際立たせている。

髪は肩につくかつかないかの長さなので、麻で適当に後ろでくくっている。

少女の名は「ブルージー」。

彼女は水辺にたどりつくと、小走りになってきらきら光る水面に船をスライドさせつつ自分もひょいっと飛び乗った。

ブルージーは手際よく帆を張って、さらに櫂をひたすら漕いで島影も見えない所まで船を進めて行った。

海は透明度が高く、覗いただけで底の様子が手に取るように分かるくらい。

船の重りを海へ沈めると、ブルージーは2、3回深呼吸したあと、海へと飛び込んだ。

彼女の目的は、海底にあった。

無数の気泡と共に深く潜っていくと、大小さまざまな透明の石が転がっていて、それを拾い上げて、腰のカゴに入れる作業を開始した。

この石は、とある町での儀式に使う、ボトルの作成に必要不可欠な物なのだ。

この場所は、遠目から見ると海底全体が遺跡のようにも見えなくはないのだけれど、今は誰も気にしていない。

ブルージーはまだ幼い頃に、『自分たちの先祖はここに住んでいた』と聞かされていたが、そんなのはただの言い伝えに過ぎないと

思っている。

今日はどれだけ探っていこうかな。

カゴをとりあえずいっぱいにしてから、ブルージーは自分が持つて浮上できそうな手頃な大きさの石を探し始めた。

ブルージーのすぐ上に大きな影が迫ってる事にも気づかずに……。

頭上から射し込む光がふっと途切れたのに気づいて、ブルージーは海面を見上げた。

するといきなりブルージーの目に、白と黒のツートンカラーのイルカの顔がアップで映った。

驚いたブルージーは溜めていた息を思わずみんな吐き出してしまった。

たまらず海面目指して一気に浮上する。

「もうっ、メーア！　びっくりさせないでよ！」

一緒に海面に顔を出したイルカに向かって、ブルージーが少し怒ったように文句を言った。

「キュキュキュッ」

そんなブルージーをからかうように、メーアは身体をゆすって愉しげに鳴いた。

「このおっ！」

ブルージーはメーアにがしっ！と抱きつくと、メーアはスピードをあげて海底へと潜っていった。

ブルージーはメーアとひとしきり遊んだ後、再び作業を開始した。そして6回目の作業を終えてしばらく息を整えていた時。上空から何かが落ちてきた。

「何かしら？」

「キュイ？」

ブルージーとメーアが同時に見上げた。

きらん、と金属が光ったのが見えたかと思うと、それがみるみるくるくる回る人影になって、「わあゝ！」という悲鳴と共に、あっという間に海の中へ派手なしぶきをあげて落ちて沈んでいった。

2 海人と空人

ブルージーとメーアは突然の出来事にしばらく固まっていた。すると先程の空からの落下物が、大の字になってぶくん、と浮いてきた。

楕円形の、見た事もないシルバーのボードと一緒に。

どうやら、自分と同じ年ぐらいの少年みたいだ。

ブルージーは気を取り直して少年のそばまでそつと泳いでいくと、気を失ってる彼のほつぺをツンツンと突いてみた。

「わっ！」

すぐに気がついた少年は、またためいっぱい驚いて再び沈みかけたが、メーアがさつと下になって沈むのを防いだ。

少年はメーアに腰掛けるような状態で顔にかかったシルバーの髪をかき上げてオールバックにすると、ブルージーにいきなり質問をしてきた。

「なあ、ここって『海』っていうところなんだよな？」

突拍子もない事を言われて、ブルージーはきょとんとした。

「あんた、頭でも打った？ 海じゃなかったら、どこだっていうのよ？」

その言葉に、少年はみるみる顔を輝かした。

「ほんとだな？ 海。海！ やつと来れたあー！ やほー」

な、なんなの？ こいつ。

少年の普通でないおおはしやぎに、しばらく言葉が出ないブルージーだった。

ブルージーは、全く泳げないという少年を、とりあえず岸まで乗せていく事にした。

「ねえ、なんで空から落ちてきたの？」

船に乗ってすぐ、ブルージーは単刀直入に質問した。

「……俺さ、実は『空人』……なんだ。ってそんな事いきなり言っても訳わかんないよな」

ポリポリと頭をかきながら、きまわずそうに言った。

「そらびと……？」

ブルージーは怪訝な顔で首をかしげた。

「やつぱり知らないとか？」

「うん」

ブルージーの即答に少年はため息をついて肩を落とした。

「俺の名前はジナーフ。んで、このボードはフォーゲル、っていうんだ」

ジナーフと名乗った少年は、岸に向かう途中、自分の事を話し始めた。

「ねえ、そのボード何に使うの？」

ブルージーは初めて見る、水に浮く金属でできているであろうボードに興味津々だった。

「ん？ これ？ このボードは、空中を移動するのに使うのさ。つまり、これで空を自由に飛べんの」

……空を飛べる？

ブルージーは目を丸くしてボードに釘付けになってしまった。

浜辺にたどり着くと、ジナーフはフォーゲルを船から引っ張り出して砂浜に置いた。

「うわ、やつぱり湿ってる」

しゃがんでボードを軽くひとなですると、ジナーフはため息をついた。

「え？ 金属だからすぐに乾くんじゃない？」

ブルージーが船を小屋に入れながら言った。

「いや、特殊なプレートなんで少しでも湿ってしまうと、2、3日は飛べなくなってしまうんだ」

ジナーフはとても困ったという表情で立ち上がった。

「そらびと、っていうくらいだから、空で暮らしてるのか？ それで帰れないって事？」

ブルージーはジナーフの身の上がなんとなく読めてきたような気がして、そう聞いてみた。

「そそ。そういう事。ってな訳で、しばらくかくまってくんない？」

「かくまってくれ、ってどういう事？」

ブルージーは単刀直入に聞いた。

「んー、実は俺、空から逃げてきたんだ」

ジナーフは頭をポリポリ掻きながら告白した。

そして、自分の身の上を話し始めた。

……俺さあ、なんにも悪い事していないのに、いきなり飛空警団から追われてさあ。

たぶん、誰かが俺に濡れ衣をかぶせたんだと思う。だいたいの見当はついてるけど。まったく迷惑な話だよな。

ほんとは決められた人以外は地上の人とは関わってはいけないってヘンな掟があつてさ。

他に逃げるところがないじゃん？それを承知で地上に降りようとしたんだけど。やつらしつこいから追っかけてきてさ、あっちが攻撃を仕掛けてきたもんだから、それをかわしたらバランス崩しちゃってドボーンって訳。

どっちみち、フォーゲルが濡れちまったから飛べるまで乾くのに、日はかかると思う。

それまで、悪いけど倉庫でもどこでもいいから隠れさせて欲しいんだ。もしここで見つかったら、逃げようがないからさ。

ブルージーは自分の住んでる家にジナーフを連れて行った。

「納屋じゃかわいそうだからさ。うちにいていいよ」

「えっ？ いいの？」

ブルージーの予想外の申し出に、ジナーフはとても喜んだ。

「うちの両親さ、早くに死んじゃったの。で、ここには私ひとりだけで住んでるんだ」

「……そなんだ」

ジナーフは視線を落とした。

そんな彼を見て、ブルージーは慌てて付け加えた。

「あ、でもね。こうやってちゃんと仕事もできてる訳だし、村の人みんな優しいしさ。全然大丈夫なんだよ！」

ジナーフはそんなブルージーを心底羨ましそうに見た。

「強いんだな。おまえって」

「なあに言ってるんのよっ！ 居候させる代わりに君にもいっぱい働いてもらうからねっ！」

ブルージーはジナーフの肩をバンバン叩きながら思いっきりどやした。

「ったく、痛ってえなあ。もう」

そうぼやきながらも、ちよっぴり嬉しそうなジナーフだった。

「早速仕事してもらおかな、って思ってたんだけど、着替えの方が先だね。」

そう言って、ブルージーは部屋の奥から服を持ってきた。

「これね、父さんのだったんだ。ちよつとぶかぶかかもしれないけど、それ着てて風邪ひくよつかマシでしょ？ そっちの部屋に真水の入った桶があるから、それで身体を洗ったらタオルでよく拭いてから着替えんのよ？」

まだずぶ濡れのままだったジナーフは素直に従う事にした。

「さんきゅ」

「じゃあ、あたしは採ってきた石を運んでくるから」

ブルージーはそういい残すと、表に出て行った。

足音が遠ざかっていくのを確かめてから、ジナーフは速攻で水浴

びと着替えを済ませた。

「海の水って、不思議な匂いがするんだな」
「いましがた自分の脱いだ服からは、まだ潮の香りがしていた。」

しばらくして、ブルージーが袋を担いで帰ってくると、
「ふうつ。重かったあ」

かなり年季の入ったテーブルに、どさつと袋を置いた。
「この石をね、表面をきれいに磨くと素材屋さんが買ってくれるの。
この仕事を君にも手伝ってもらうね」

ジナーフは石をひとつ取り出して光に透かせて見た。

石は光線を幾重にも屈折させてきらめいていた。

「すげえ。こんな透明な石見た事ない」

「でしょ？ ああ深さを潜れるの、あたしだけなんだ。 だからこ

れだけ質のいいのを採れるんだ」

ブルージーはさも得意げに胸を張って見せた。

「ね、君も潜ってみない？」

ジナーフはいきなりの誘いにかなり戸惑った。

「うゝん、俺水に潜った事ないし……それに空人は海の水に濡れる
と命はない、っていう言い伝えもあるし……」

煮え切らないジナーフを見てブルージーはくすつ、と笑うと、

「なあに言ってるの。さつき海に落ちたけど、なんともなかったで
しょ？」

ジナーフの肩をバンバン叩いた。

「そついえば……そうだよな。なんでだろ？」

「なんで、って思っても、それが事実なんだから。 空人の言い伝え
は、迷信だって事が分かったでしょ？」

きっぱりとブルージーが言い切ると、

「そだな！」

と、ジナーフは嬉しそうにいうと、わくわくした顔でブルージーに

言った。

「明日、俺も海に潜ってみよつと！」

「うんうん。一回やってみたら？ 大丈夫。もし溺れたらあたしが助けてあげる。」

ジナーフは、ははは……と乾いた笑いをもらした。

「でもその前に、もし空人にどつかで会っても、俺だって分からな
いようにしたいな。」

「そだね。考えとく」

翌日。ブルージーは、ジナーフに黄色いバンダナを渡した。

「これを巻いたらいいんじゃない？ そんな色の髪の人、ここらでは
いないから。それでバレそうじゃない？」

ジナーフはシルバーの自分の前髪をつまんでみた。ブルージー
の髪は、夜の闇のようにまっ黒だ。

でも瞳はジナーフと同じ澄んだ深めのグリーンをしている。

ジナーフは自分の頭を包み込むようにして、バンダナを巻いた。

「うんうん。似合っつ！ さ、海に出よう！」

3 海の中で。

ジナーフは借りたバンダナを頭に巻いていた。
白いＴシャツに紺のデニムのハーフパンツのスタイルになつて
るので、見た目はこの村のどこにでもいる少年という感じ。

ふたりは早速船で沖合に出て行った。目指す場所は、いつもの採
石場。

風がかなりあつたのでブルージーは帆を張った。

帆は風をいっぱいに孕んでスピードを上げて海面を滑るように進
んでいく。

「すつげえ速いじゃん！ 空中を飛ぶのとはまた違う速さだよな！」

わくわくしながら舳先から身を乗り出すようにして、ジナーフは
行く先を見つめていた。

たまに波に乗り上げたりしてバウンドすると子どもみたいにはし
やいだ。

「ひやつほう！ 最高だぜ！」

しばらく走った時、ジナーフがブルージーの方を振り向いた。

「なあ、まだあんたの名前、聞いてなかったよな？」

ブルージーは舵を巧みに取りながら言った。

「あ、そだね。もう言ったかと思ってたんだけど。 あたしはブル
ージーっていうの」

「そなんだ。なんだか海っぱい名前だよな」

ブルージーは、ふふつ、と笑った。

「なんて意味か知らないんだけどね。 んでさ、『ジナーフ』ってい
うのは、

実は古い言葉で『翼』って意味なんだよね。 空を飛ぶっていう君に
はぴったりじゃん」

「えっ？ そうなの？ 初めて聞いたなあ」

そんな会話を続けているうちに、いつもの場所に着いた。

ブルージーは、ジナーフに潜り方をレクチャーしていた。

「んとね、ジナーフは潜るの初めてだそうだから、いきなり底まで潜っちゃだめだからね。大きく2、3回深呼吸をしたら息を止めて潜って。んで苦しくなってきたら即水面上がってね」

「ん。分かった。やってみるよ」

ジナーフはそういつと言われた通りに深呼吸すると水中に姿を消した。ブルージーもそれに続く。

ジナーフはそのままどんどん潜っていった。

…… ちょっと！まだ底まで行っちゃだめって言ったのに！

ブルージーは内心かなり焦った。でもジナーフは苦しそうな様子もない。そしてとうとう底にたどりついてしまった。

ブルージーは心配そうにジナーフの肩を叩いた。ジナーフは振り向くと、にかっ！ ととびきりの笑顔で、やったぜ！ とでも言うように親指を立てた。

でも笑った瞬間、ジナーフの鼻と口から溜めていた空気がごぼごぼと！ と、もれてしまった……。

ふたりが浮上してから数分後。

ジナーフは水中で笑ってしまったばかりに、気管に海水が入ってむせてしまい、まだげげほほしていた。

「だから言っただじゃん。もお、人の言う事全然聞かないんだから」ブルージーは呆れ帰ってジナーフの背中をさすってやっていた。

「あんなつもり……げげほ……はなかったんだけどなあ……」

「今日は潜るの、よしとく？」

ブルージーはたずねてみた。

「ん、もうだいぶ楽になったから、もつかいトライしてみるよ。でもさ、全然苦しくなかったんだよな。潜ってる時には」

「えっ？ そうなの？ あたしだって底まで潜れるのに1年はかか

「つたんだよ？」

「そうなんだ。俺って結構体力あるかも」

「じゃあ、潜るのはもちよっと休憩してからね」

「りょ〜かいっ！」

それからブルージーとジナーフは、何度も潜って採石をした。

もうそろそろ船がいっぱいになって、ブルージーは今日はもう止めておこうかと思っていた時、ジナーフが浮上してきた。

「なあ、この石、形が変わってるよな？」

ジナーフが差し出した石は、薄緑を帯びた、腕の長さくらいの半透明の六角柱だった。

いつも採ってるのは、ごつごつしている。

「わあ……きれいなえ。これなら、きっと素敵なボトルができるでしょうね」

「ボトル、って何に使うの？」

「ある街で、魔法をゲットするセレモニーに使うのよ。これ、最高の素材なんだから！ 私もいつかは参加して、絶対魔法を使えるようになるんだ！」

「そうなんだ。俺も魔法持ってないから、そのセレモニーやってみたいなあ」

ジナーフも興味津々な様子。

「じゃあ、機会があったら、絶対一緒に行こうね！」

「あ……うん！」

ジナーフは一瞬ためらったかのように見えたが、すぐに元気よく返事をした。

「約束だからね！ じゃあ帰ろっか」

「あ、帰りは俺に舵を取らせて。一度やってみたかったんだ。」

「え〜？ 大丈夫かなあ？」

若干不安そうなブルージーの手を引っ張って、船の中央に座らせ

ると、ジナーフはおもむろに舵を取ると、風が上手い具合に吹いてきて、帆がぱんつ、と張った。

「よぉ〜し！ とばすぞ〜！」

そついうと船は勢いよく走り出した。

「すごいねえ！ ちゃんと風読んで走ってんじゃん！」

「あつたりまえさ！ だって俺は空では『風の申し子』って言われてたんだからさ」

「で、調子いいところ悪いんだけど」

「はい？」

「……村、あつちなんだけど」

ブルージーが指差した方向とは180度反対の沖に向かって、全速で船は走っていった。

ジナーフが下の世界に来て3日目の朝。

「フォーゲルも完全に乾いたみたいだし、久々に飛んでみたいなあ」

ジナーフが窓を見上げてつぶやいた。

雲ひとつない真つ青な空。 まぶしいくらいの太陽。 うってつけの飛翔日和だ。

「じゃあ飛んで見せてよ！」

ブルージーが身体を乗り出してワクワクしながら言った。

「えゝ、だめだよ。飛びたいのはやまやまだけど、明るい時に迂闊に飛んでたら、またヤツらに見つかっちゃうもの」

ジナーフはちょっと困ったように答えた。

「ヤツら？」

「うん。ほら、俺を攻撃してきたヤツらさ」

「じゃあ、どうやって帰るの？」

ブルージーは興味津々といった風で乗り出してくる。

「夜はヤツらは極端に視力が落ちるんだ。だから夜を狙おうかな、

と」

「そなんだ。じゃあ、今晚試しに飛んでみたら？」

ブルージーはジナーフをせかすように聞いた。

「そだな。早く帰りたいけど、夜って俺も飛んだ事ないからなあ。

1回テスト飛行してみないとな」

「うんうん。じゃあ今日はたっぷり昼寝しとくといいよ。あたしは海に出るからさ」

そういいながらブルージーは支度を始めた。

「お、ありがたいなあ。じゃあお言葉に甘えて……っ」と

そういうと、木陰に自分で作ったハンモックに横になった。

4 真夜中のテイク・オフ

その日の夜。

ジナーフはドアから顔だけを出して、そっと辺りをうかがった。
今夜は月はなく、その代わりに夜空には無数の星がきらめいている。

誰もいない事を確認すると、ジナーフはフォーゲルを小脇に抱えて無言で砂浜まで小走りに移動した。ブルージーはその後を追う。
早く飛びたくてうずうずしているみたい。ブルージーはジナーフの後ろ姿を見ながら微笑ましく思った。

波打ち際ギリギリまで行った所にフォーゲルを置いて、ジナーフはその上に立った。

目を閉じて深呼吸をひとつして、腰を少し落として身体をかがめ、星空を見上げてジナーフは静かに、でも力強く呟いた。

「フォーゲル。テイク・オフ！」

ブルージーの目の前でフォーゲルが音もなく宙に浮き、頭の上まで上がるとシュツ、っと空気を鋭く切る音だけを残してジナーフはあっという間にはるか上空に行ってしまった。

星の海の中で、フォーゲル自体もほのかに鈍い光を放ち始め、まるで不思議な動きをする流れ星のようだった。

「いいなあ……私も翔べたらなあ」

砂浜に腰をおろして見上げながら思わず呟いた。ブルージーは空を翔べるジナーフが心底羨ましかった。

数分経ってから、ジナーフが戻ってきた。
バランスを上手く取りながら、ゆっくりとブルージーの前に降り立った。

「ふうっ。なんとか翔べたよ！ 夜翔ぶのって、こんなに気持ちいい

いつて事知らなかったぜ！」

「ふうん。そうなんだ」

ブルージーは少しやきもちを焼いていたので、わざと冷たくジナイフに言った。

そんなブルージーの気持ちを察してか、ジナイフはフォーゲルの前半分に自分を移動させるとブルージーに声をかけた。

「よかったら、一緒に翔んでみる？」

ジナイフの言葉に、ブルージーは待ってましたとばかりにうんうんと頷いた。

「ほんとあ？！ 私ね、ずっと前から空を翔んでみたいと思ってたんだ！」

予想通りのブルージーの反応にジナイフはニツと歯を見せて笑った。

「じゃ、フォーゲルの後ろ半分に立って、俺の腰にぎゅっとしがみついて足を両足とも踏ん張っている事。いいか？ 絶対離すなよ。落ちたくなかったらな」

「う、うん。分かった」

ブルージーは「落ちたくなかったらな」という言葉に少し緊張気味に言うと、言われた通りにした。

ジナイフの腰に手を回すと見た目よりたくましい体格で、ブルージーは思わずドキッとしてしまう。

「よっし！ 行け！ フォーゲル！ テイク・オフ！」

さっきよりもずっと大きな声で唱えると、ふたりを乗せたフォーゲルはあっという間に空高く垂直に舞い上がった。

「わああ……高い！ すごい！」

ブルージーは、波乗りともまた違った不思議な浮遊感の中、足元のずつつと下に自分の小屋が小さな光の点になっているのを、ドキドキしながら眺めていた。

今度は上空を見上げると、星が一層輝きを増して見えてもうちよっと手を伸ばしたら届きそうだ。

「なっ？　すげえだろ？」

ジナーフが前を見据えながら得意気に言った。

「うん！　こんなの初めて！　波に乗ったのとは全然違う」

「じゃあ今度は水平飛行だ！」

ジナーフは身体を軽く前に傾けるとフォーゲルは暗い空の中を滑るようにして移動し始めた。

以外と速いスピードで、ブルージーは身体が置いてかれそうな感覚に捕らわれた。当然、ジナーフにしがみつく手にもさらに力が入る。

「わわわ、ちよっち苦しいって〜！」

ジナーフは照れてるのかほんとに苦しいのか、うわずった声で言った。

「あ、ごめん！　でもなんだか落ち着かなくって〜。」

「あはは。誰だってそうさ。俺だって初めて兄貴に乗っけてもらった時そんな感じだったから。」

「ジナーフって、お兄さんいるんだ」

「そそ。今頃心配してるだろうなあ……。普段はケンカばかりしてたけど、いざ離れてみるとなんだか寂しいような気がする」

「そっか。早く戻れるといいのにな」

「問題はそれなんだよなあ。まともに帰ったら、『とつとと捕まえてください』って言ってるようなもんだしなあ」

「でもさ、ジナーフはなんにも悪い事、してないんでしょ？」

「あつたりまえじゃん！　でも残念な事にそれを証明するものって何もないからなあ」

ジナーフはそう言った後、ずつと無言で飛び続けた。

……私って空の事なんにも知らないから、ジナーフの力になってあげられないのかなあ……

ブルージーは知らないうちにジナーフの背中に頭をくっつけていた。

風を切る音の中に、かすかに聞こえるジナーフの鼓動に耳を傾けて

いると、何かなんでも彼を守ってあげたい……！
そんな想いがブルージーの気持ちの中に広がっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986o/>

Traveling High

2010年10月30日21時10分発行